

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	3290400153		
法人名	有限会社 楽舎		
事業所名	認知症高齢者グループホーム 宇賀の里 楽舎		
所在地	島根県出雲市奥宇賀町23-1		
自己評価作成日	平成23年1月5日	評価結果市町村受理日	平成23年3月3日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.fukushi-shimane.or.jp/html/kaigojyuhou/index.html
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	株式会社 ワールド測量設計
所在地	島根県出雲市荻椋町274-2
訪問調査日	平成23年1月21日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

理念に「愛、家族、絆の架け橋に」と掲げており、毎月ご家族宛てに様子を書いた手紙を郵送したり、ご本人からのお手紙の支援も行っている。又、行事なども案内を送り、日頃からご家族と入居者さんが、共に過ごせる機会を多く持って頂けるよう働きかけている。毎年、年末の「一年間元気に過ごせてありがとうございます会」ではたくさんのご家族が参加して下さり、大きな感動の声を頂いている。面会時には、お茶を必ず出すようにしており、ゆっくりご家族で過ごせる時間を作れるよう心がけている。又、楽舎の特徴として、①入居者さんの清潔と臭いのない施設をモットーにして支援②口から食べる喜びを最後まで感じて頂けるよう支援③昔ながらの鍵のかけない解放感あふれる平田の自然を感じながら、心豊かに明るく・楽しく・元氣よくをモットーに支援を心がけている。又、入居前からのかかりつけ医をそのまま入居後も続行して、医療の支援をDrと連携して行っているため、信頼関係もそのままに、こまやかな支援ができています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

豊かな自然に囲まれ、大きな梁の枠組みが見える木造の建物からは、心とむき懐かしい雰囲気を感じられる。朝は小学生の登校に合わせ、ベランダから手を振っての見送りを日課としている。職員はユニークで斬新なアイデアを自由に出し合って業務に取り入れ、自分達も業務の中にもやりがいや喜びをみつけながら、入居者の個性や力を発揮出来るような支援に取り組んでいる。昭和の祭りを再現した「甘味処 楽舎」や「記録に残したい あの時」をテーマに懐かしい写真を持ち寄り、家族との思い出の橋渡しをするなど、工夫を凝らし地域や家族との絆を大切にしたい支援に努めている。職員教育にも熱心な事業所であり、皆が同じ方向性を持ってサービスの質の向上に努めている事が窺え、職員の一生懸命さが伝わってくる。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25) ○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができています (参考項目:9,10,19) ○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38) ○ 1. 毎日ある 2. 利用者の2/3くらいが 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20) ○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4) ○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12) ○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う ○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28) ○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「入居者の方と生活を共にし暮らしを支え、命を護る」「愛・家族・絆の架け橋に」を理念として掲げ、毎日唱和し全職員が理念を共有できている。施設へ入所しても地域の一員とせず暮らしていけるように地域へ出かける機会を多く持ち、地域への理解を深めるよう交流したり、家族との絆も途切れない様に家族へお手紙の支援などしている。	理念の他、毎月の目標を決めて利用者と一緒に取り組んでいる。理念と月の目標は、ホーム内の掲示や毎日朝礼の時に唱和することで、意識の共有を図っている。行事にも、あらゆる工夫を凝らし地域や家族との絆を大切に支援に努めている。職員は自分達の理念に誇りを持ってケアの中で実践している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 平成23年1月5日	「元気に社会参加」ができるよう働きかけを行っている。近所の方には行事があれば必ず案内を出し、毎年参加して下さる人数や機会が増えており、顔なじみになってきている。家族の方が大正琴のボランティアに来て下さったり、来て頂くだけでなく楽舎からも西田小運動会、ドレミファ広場、地元のお祭り、福祉フェスティバルと毎年地域へ出かけて行って交流を深めている。	地域主催の福祉フェスティバルには、今年度も入居者全員で参加する事が出来た。お祭りや運動会など、地区の行事にも利用者と一緒に参加している。又、近隣の方が収穫した野菜等を差し入れて下さったり、小中学生や地域ボランティアとの交流も日常的である。ボランティアをただ受け入れるだけでなく、話し合う機会を持って、認知症やグループホームの啓発の場ともなっている。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	毎年参加している福祉フェスティバルでは、フラワーアレンジメントや音楽療法のステージを通してGHや認知症の方の理解につながるよう働きかけ、毎年大成功している。又、地元の自治会の方に楽舎の避難訓練に参加して頂き、入居者の方がどのような状況なのか等理解を深めて頂いている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議には家族や入居者、地域のボランティアの方にも参加して頂いている。そこで皆様の日頃思っていることや希望など、率直に意見を出してもらい、今後の支援に生かすようにしている。	2ヶ月に1回の運営推進会議では、活発な意見交換をしている。会議には、毎回法人役員も参加し、意見や要望を直接聞いて現状の把握に努めている。一般職員も交代で参加しており、内容によっては利用者も参加して意見を発表されている。行事に合わせて開催したり、幅広く参加を呼びかけているものの、参加される方は限られている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と同様から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	2か月に1回の運営推進会議には、出雲市の職員の方が必ず出席して下さり、楽舎での支援や取り組みについて報告、意見交換しており、ケアのヒントを頂いたり、他の施設の取り組みなどの情報を得たりして、連携を取っている。出雲市介護相談員の訪問も3か月に1回あり、入居者の方の思いなど聞き取り、職員へ伝えて下さるなど、良い支援につながる様協力して取り組んでいる。	市のグループホーム協議会や地域の小規模連絡会、研修会等に参加し、相談の機会を設けている。赤い羽根共同募金には、法人として、毎年職員が街頭に立っている。又、福祉フェスティバルでは、利用者と一緒にステージに立ち、グループホームの啓発に努めている。又、ヘルパー研修の受け入れなど地域福祉の向上へ貢献している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介指基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	楽舎の支援方法(特徴)である「昔ながらの鍵をかけた解放感あふれる平田の自然を感じながら、心豊かに、明るく、楽しく、元気よく」を全職員がモットーにして、言葉のブロックやベッド柵なども身体拘束につながる事をよく理解しており、拘束をしないケアに取り組んでいる。命に危険が及ぶようなやむおえない場合は、その都度家族・Drへ状況報告し、必ず同意を得ている。	入居時に、身体拘束を止むを得ず行う場合の説明を行い、家族から同意の署名捺印を頂いているが、個別に説明を行い同意を頂く事例は無かった。建物は交通量のある道路に面して建っているが、日中は玄関に鍵を掛けず、常にホールや事務所に職員が居て目配りしている。ヒヤリハットは記録に残し、他の職員のコメントを求めるなど、共通認識を持った上で対応方法の協議を行い、家族への連絡も行っている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	内部研修で虐待防止についての研修を行い、日頃も職員同士で声をかけ合い、入居者の気持ちになって声をかけたりし、注意を払い、支援している。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	権利擁護に関する制度の研修等、内部研修で行っている。入所時には、ご本人に必要なかどうか関係者を交えて検討するように努めている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には必ず職員が2人以上で説明し、入居者、家族の疑問・不安点をよく聞くようにしている。家に持ち帰って頂き、ゆっくり契約書を読んで又後日持って来て頂く形にしている。入居後も、入居者、家族の話をよく聞く機会を持ち、不安や疑問な点が解消されるよう努めている。改定や連絡事項があればその都度お手紙や面会時に伝えている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進会議には入居者、家族にも参加して頂いており、外部の方も参加されているので意見をその場で言ってもらっている。又その意見は今後の支援に反映させている。	新聞の送付や、毎月居室担当者がご家族宛に手紙を書いて、日々の様子をお知らせしている。行事には家族を案内し、家族も参加する『1年間ありがとう会』や、利用者全員が参加しての福祉フェスティバルを通して、利用者と共に生活する様子を伝える工夫をしている。面会時など、家族に積極的に様子を伝えたり、伺ったりと、出来るだけ家族と会話していこうとする姿勢が窺える。市の介護相談員の来所も継続されている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	日頃から現場職員の意見が出やすいように朝礼やちょっとした空き時間に意見交換している。全体研修(職員会)でも、職員同士意見交換をし、管理者⇒施設長⇒代表役員へつなげている。	どんな意見も言い合えるBS法を取り入れながら、職員はユニークで斬新なアイデアを自由に出し合い業務に取り入れている。研修や行事報告書では、評価や反省が必ず明記されており、日々のジョブオントレーニングが行われている。他事業所の見学や交換研修も取り入れている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年1回人事考課があり、代表役員と直接、全職員が一人一人面談し、きちんと給与の面や役職について話し合う機会が持たれている。1年通して研修や資格取得等、きちんと評価される。(給料UP)		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	認知症支援の研修は定期的に行っており、新人も、古い職員もレベルアップに努めている。外部の研修へも積極的に参加しており、職員会で発表するなどし、他の職員も学べるようにしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	GH連絡協議会の研究発表会に毎年参加しており、他の施設の取り組みなど自施設へ持ち帰り勉強している。ヘルパー実習も受け入れており、教えることで自身も学び、振り返りの場となっている。		

自己	外部	項目	外部評価	
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援				
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	担当ケアマネと連携を取りつつ、ご本人の納得の上で自宅に赴き、ご本人の話をゆっくりと笑顔で傾聴するよう努めている。また、随時見学を受け入れており、入所前には見学をお勧めしている。	
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	担当ケアマネからの事前の情報により、ご家族の思いを確認して初回面接がスムーズにいくよう努めている。自宅訪問させて頂き、要望を伺う他、随時見学、相談の体制を整えて気軽に連絡頂けるような雰囲気作りをしている。	
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	ケアマネからの情報とご本人、ご家庭からの要望、ニーズを勘案して、様々な分野でのサービスを検討し、必要な支援を見極めている。入所に至らない場合も、サービス情報を提供して参考にして頂いている。	
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	「入居者の方と生活を共にし暮らしを支え、命を護る」の理念に基づき、共同生活している。その中で経験豊富な入居者の方からたくさんのごことを学び、尊敬の気持ちを持って接している。	
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	理念「愛、家族、絆の架け橋に…」をモットーに日々支援している。毎月、家族への手紙で入居者の方の様子をお知らせして、家族様も入居者の方を共に見守っている、支えているという意識を持って頂けるよう働きかけている。	
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入所前はもちろん、入所後も家族、面会者、本人から情報を収集して、ご本人の過去の絆を職員間で共有して、支援につなげている。馴染みの場所を訪れたり、大切な方、馴染みの方との外出・外泊も受け入れて関わりを続けて頂いている。	入居後も、住み慣れた地域の運動会に参加したり、自宅に立ち寄るなど柔軟な支援を行っている。又、毎月家族と外出や外泊をされる方もあり、家族とのつながりが途切れないよう支援している。
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずにご利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者間で会話が弾むよう、共有できる話題を提供したり、会話の橋渡しに努めている。できるだけ家事をたくさんの方と共同で行い、共同生活の実感を味わって頂けるよう努めている。	
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所されて他の施設・病院へ移られても、時々職員が顔を見に伺ったり、お見舞いに行ったりと今まで築き上げた関係が途切れないよう、支援に努めている。又、退所されてからも葬式も参列し、最後まで見届ける支援を行っている。	

自己	外部	項目	自己評価		外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント						
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の中での時間を大切にしている。何気なく言われた一言でも気づきにできるよう小さなことでも職員間でカンファレンスを行い、その方が生活を自分らしく過ごせるよう支援している。困難な場合は、家族を巻き込んでカンファレンスをしている。	職員は居室で1対1で過ごす時間を作るなど、一人ひとりとゆっくり過ごす時間を作るように心掛け、信頼関係を構築しながら、利用者の意向や思いを把握している。記録用紙が工夫されており、現状や問題がきちんと記録されている。1月には、利用者から要望を聴いて、みんなで「温泉へ行こう」という目標をたて、6月には職員も一緒に温泉で入浴された。		
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	キーパーソンだけではなく、他の関係者(友人、兄弟等)とも関係を築きお話しする中でその方の過去・生活歴の把握に努めている。小さな情報でもアセスメントシートに記入し、職員間で共有している。			
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	毎日の記録に個人の一日の過ごし方や様子など記入する欄があり、一目で分かるようにしてある。日頃の関わりの中で出来る事・出来ない事、得意な事など常にアセスメントしている。			
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	定期的に個別の子エックシート等を使い、その方の今の困っていること、ニーズを把握し、ケアに生かしている。家族にも面会時に希望を聞いたり、本人の様子など伝え、本人・家族・担当医など関わりのある人全員で話合っている。	各種の記録用紙は熟慮を重ね出来たものであり、毎日の職員の評価や気づきが、プラン作成や見直しに反映し、実践されている。毎日の介護録は、各ページに長期目標と短期目標が記されており、いつも意識して関わる事が出来ている。居室担当者を中心に定期的にカンファレンスを行い、計画作成者が見直し、プランを作成している。		
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	毎日の記録にはケアプランを評価する欄があり毎日3段階で評価している。ケアプランの長期・短期目標も毎日の記録に落とし込み、目標に沿って支援ができるようこしてあり、出来た、出来なかったなど詳しく記録するようにしている。少しでも変化があればモニタリング・カンファレンスを随時行い、見直しを行っている。			
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	家族が遠方におられ、なかなか来れない方などの病院受診などは地域のヘルパーやタクシーを利用し受診されている。外部の方と接することにより入居者さんも気分転換されているよう。家族との外出・外泊もいつでも自由にして頂いている。			
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	万が一に備え、近くの交番の協力を日頃から得られるようお願いしている。帰宅願望の強い方の顔写真を置いてもらい、もし行方不明になった時にすぐ分かる様手記して頂いている。町内の方・近所の方に運営推進会議や行事、避難訓練など参加して頂き、より楽舎の利用者の方達を知って頂けるよう取り組んでいる。			

自己	外部	項目	自己評価		外部評価		
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医は入居後も変更せずに継続してもらおうと、本人・家族が安心して受診できるようにしている。受診は基本的に家族対応だが、必要に応じてヘルパーを利用したり、職員が付き添ったり臨機応変に対応している。受診時には必ず日頃の様子を家族・Drへお手紙にて伝えている。	近隣からの入居者が多く、入居前からのかかりつけ医を継続されている。緊急時の搬送先の希望も確認されている。専門医にかかっている方もあり、受診の際は、文書で情報提供するなど連携をとっている。看護師が退職し、現在不在となっているが、同敷地内に併設する事業所には、数名の看護師が在籍しており、常時相談、連携できる体制にある。			
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	朝の申し送り時に毎日必ずNsへ気づきを伝え相談し、早期発見ができるよう努めている。必要に応じNsよりDrへ繋げ、指示を得ている。				
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入居者の方が入院された際には、本人の情報を入院先へ提供し、家族・担当医・職員が話し合い、どのように楽舎での支援をしたらよいか等、退院後の支援が速やかにできるように努めている。				
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	本人・家族・介護職員・管理者・ケアマネ・Dr・Nsと話し合いの場を設けて楽舎でどこまで支えられるのか、楽舎でできる支援、本人、家族の意向など十分に話し合い、今後の支援方法を決めるようにしている。	入所の際、事業所で出来る事、出来ない事を家族に伝え、了解を得ている。医療が必要になられた方には、その都度、家族とも話し合い、納得された上で対応している。看取りは行わない方針であるが、国の指針を見極めながら、グループホームのあるべき姿と利用者、家族の希望の狭間で、日々職員間で話し合いを重ねている。入院中に毎日面会に行ったり、退所後も家族と思い出を語り合うなど、継続した支援がなされている。			
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	入居者の方の急変や事故に備え、医療連携マニュアルを作成し、職員が正しい初期対応ができるよう周知している。実際に特変があった場合、その都度記録や対応を職員で見直し、誰もが急変時の対応が落ち着いて出来るよう日頃から取り組んでいる。年1回は消防の協力を得てAEDの研修や心肺蘇生法の研修も行っている。				
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協体制を築いている	災害時に問わず、職員間の緊急連絡網を作成・見直しを行っており、実際に連絡網を回す練習も行っている。年2回の避難訓練には全職員が参加し昼・夜を想定した訓練を行い、自治会・地元消防団にも参加して頂き、意見交換し避難連携マニュアルの作成に取り組んでいる。	消防署の協力により、利用者と一緒に避難訓練(昼夜設定)を行っている。今年度初めて地元消防団や近隣住民の方にも見学頂き、理解を深めた。次回は見学だけではなく、一緒に参加して頂けるようお願いされている。又、AEDの講習会や連絡網の実践研修なども行われた。利用者の避難方法の他、避難場所待機中の支援の程度など、誰が見ても分かるように具体的に記載されている。	火災訓練は行われていますが、地震や豪雪、停電など幅広い災害についての訓練もお願いしたい。		

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者の方と親しい間柄になっても、人生の先輩として尊敬の気持ちを持って接する。言葉かけに対する研修も随時行っている。自分がされて嫌な事は絶対にしないと職員は良く理解し、利用者の誇りや尊厳(気持ち)を傷つけないようさりげなく支援ができるよう、周囲の目なども配慮するよう心がけている。	各利用者の思い出の写真を持ち寄ってもらい、「記録に残したいあの時」と題してパワーポイントで紹介するなど、その方の生きざまを知ることで、より一層個人を尊重されるようになった。利用者と一緒に、職員の言葉遣いについて話し合い、各々が希望される言葉掛けをしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者の方の話を最後まで傾聴して、思いを理解するよう心がけている。昼食の時に、ゆったりと話ができる時間を持つようにしている。食べたい物、行きたい所、洋服を選ぶ、レクの参加など、場面場面で利用者さんに選んで頂いている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	外出等をする際は入居者の方に事前に希望や出欠をお聞きし、レクへの参加はご本人の気持ちを尊重して自由に参加して頂いている。無理じいはしない。楽しみにしている事、好きな事等は、気持ちを尊重して、なるべく参加できるよう職員同士連携して支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	更衣の際、入居者の方と一緒に服を選んだり、一緒に買い物へ出かけ、好きなものを選んで頂いて購入したり、おでかけや行事の際は化粧を楽しんで頂いている。男性は毎日ひげそりなど身だしなみを大切に支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	膳拭きや食器拭き、台拭きや盛り付けなど入居者の方がそれぞれできることを、できる範囲で家事参加して頂いている。昼食は楽しく取って頂けるよう、職員も一緒に食べるようにし、会話の橋渡しになるよう努めている。	利用者も調理、片付けなど自発的に参加されている。職員も利用者と一緒に食卓を囲んで、和やかに食事をされていた。盛り付けや彩にも細やかな気配りが感じられ、食欲を誘っている。「食べたい物」を食べて頂けるように調理の工夫をしている。又、食事量や飲水量をチェックし、食事が美味しく食べれるように、毎食後の口腔ケアにも力を入れている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	必要に応じて食事表を作り、どれ位食べておられるのか、何が食べやすいかなどの把握に生かしたり、水分が摂りにくい方にはゼリーを食べてもらうなど工夫している。個人の使用しているコップにどれ程水分が入るか？表にして分かりやすく把握できるようにしてある。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	必ず毎食後、口腔ケアの声かけをしたり、見守りを行い、歯磨きが困難な方にはモンダミンを使用している。		

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	立位保持リハビリや入居者の方の排泄パターンを把握し、失敗や不快な気分にならないように時間を見て、誘導している。トイレ掃除もこまめに行い、臭いのない施設・気持ち良く使って頂けるよう努めている。	24時間シートを使って排泄チェックをすることで、排泄パターンの把握にも力を入れている。立位訓練やトレーニングを行うなど、本人の意思を尊重しながら、共に楽しく生きる努力をしている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分量のチェック、一人一人コップにいくら入るか表記してあり、一日いくら飲まれたか一目で分かるようにしている。バランスの取れた食事作りが心がけ、ランジ体操・さんぼなど運動も毎日行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	入浴、1対1でゆっくり入って頂けるよう努めており、皆さんとても楽しみにしておられる。時間や曜日も特に決めておらず、希望があったり、汚れたらその都度入って頂いている。脱衣所の温度差がないよう注意して支援している。	利用者の希望と体調に応じて入浴を支援している。トイレも開放的で、シャワーを設置し、逆に風呂場には便座を設置するなど、利用者の状態を考慮した対応がなされている。夜間でも、失禁後は必ずシャワーや入浴を行っている。冬場は浴室や脱衣所を暖め、温度差には十分気を配っている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	一人一人の体調や気候の変化に合わせて快適な安眠が得られるように、衣類調整・空調管理を行っている。居室だけでなく、ホールのソファで昼寝されたりと好きな場所で自由に休息して頂いている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	毎回、薬事の確認をきちんとし、変化あれば申し送り、全職員が薬の事をよく理解できるようにしている。カルテには本人の病気のことも一目で分かるようにして閉じてあり、服薬時には誤薬がないよう名前・日付・朝昼夕を声に出して確認し服用して頂いている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	一人一人の趣味や過去の仕事のことを本人、家族からお聞きし、得意な事・好きな事を職員と一緒にやっている。一緒に野菜や花を育てて収穫したり、花を眺めて楽しみが増えるような支援をしている。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	春の花見、秋の紅葉狩りなど、肌で季節を感じてもらえるよう支援している。また、買い物など一緒にでかけ、季節の物や、値段を見て・買って、外へ出ていつもとは違った刺激で気分転換して頂いている。	少人数での季節ごとの外出、日々の外出支援も頻繁に行っている。職員と一緒に外食したり、近くのスーパーや衣料品店に買い物に行き、自分で支払いをされる方もある。市内の事業所オープン記念には、入居者と一緒に見学に出掛けられた。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個々で金銭管理をしている入居者の方もおられる。買い物に外出した際、入居者と共に支払いを行ったり、行事の一環として行った「甘味処」では本当のお金を渡し、好きな商品を買う・おつりをもらうといった事を実践した。自分で選んだ物を自分のお金で支払う行為(計算)をいつまでも大切にしていきたい。		

自己	外部	項目	外部評価		
			自己評価 実践状況	実践状況 次のステップに向けて期待したい内容	
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	入居者の方自ら希望があれば、電話をかけてもらったり、希望がなくても、いつでも電話ができる環境を提供している。また、本人直筆の手紙を何かの折には送付したり、暑中見舞い・年賀状は毎年欠かさず支援している。(自分で書くのが困難な方は、作品や写真など送っている)		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	施設全体が間接照明を使用しており、暖かみや温もりの感じられる家庭的な空間を作り出している。食事作りの良い香りや、天気の良い日には窓を開けてテラスでお茶をしたりと落ち着いて気持ちよく生活ができるようにしている。又、季節の草花を飾ったり、季節に合わせて入居者の方が作った作品を飾ったりと季節を身近に感じて頂けるよう工夫している。	“臭いのない施設”をセールスポイントに、きめ細かな掃除を行っている。居室前の廊下には、各利用者の家族や思い出の写真が掲示されており、懐かしい風景を身近に感じる事が出来る。又、色々な高さの物干し竿を準備するなど、利用者目線での支援をしている。利用者と一緒に苗を買って、プランターで夏野菜や花を育てたり、頂いた野菜で切干大根を作ってベランダに干すなど、季節を味わい楽しまれている。	駐車スペースに屋根がないので、外出や通院介助の際、天気が悪い時には配慮されていますが、機会があれば検討をお願いしたい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ホールや廊下にはソファ、冬にはこたつがおかれ、そこで新聞を読まれたり、気の合う入居者同士で会話を楽しまれたり、TVを見たりと自分の時間を持ち、自分のペースで過ごせる環境を提供している。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室は慣れ親しんだ家具や家から持参された装飾品などを置かれ、ご自分の家(部屋)のような空間作りをしている。配置も自宅そのままに、家族と協力して入居後も必要な物はその都度家から持参して頂いている。又、ご自分や家族の写真を飾ったり、レクで作った作品を飾り、落ち着いて過ごして頂けるようにしている。	居室に決まった家具は置かず、ベッドや畳、家具の配置や雰囲気は全く違っている。利用者が自宅で使っていた馴染みの家具や大事な物を持ち込んで頂き、ぬいぐるみに囲まれた部屋など入居者の個性が感じられる居室が多い。仏壇や位牌を持ちこみ、居室で朝、夕の勤行を続けられている方もあり、利用者の生活歴を大事にしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	施設全体は段差がなく、手すりが付いているなどバリアフリーで安全な環境となっている。又、「食堂」「トイレ」など、すぐ分かるように入居者の方の目線の高さで張り紙があり、各居室には表札があり、迷われないよう工夫してある。		